

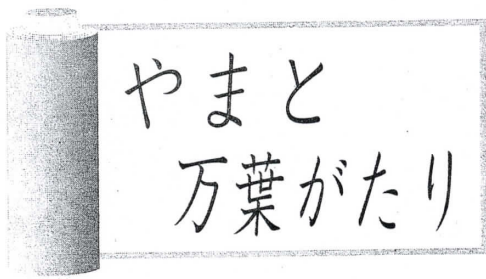
春は萌え 夏は緑に

紅くれなゐの 綵ま色だに見ゆる 秋の山かも

作者未詳(巻十・二一七七)

この歌は作者不明の歌を季節ごとに分類した巻十に収められています。さて、どの季節の歌でしょうか。春、夏、秋と入っているのに季節を超越しているようにも感じますが、この歌の主眼は秋の山の彩りにあり、「秋の雑歌」に収められています。わかりやすい歌ながら、実はいろいろと独特な要素があります。

景物ごとにまとめて配列される中、この歌は「山を詠める一首」と題されています。続きに「黄葉を詠める四十一首」があるので、この歌は黄葉ではなく、山全体を詠んだものとして、一首のみ別扱いになっています。



2句目には「夏は緑」とあります。「万葉集」中緑はこの歌と、「浅緑染め掛けたりと見るまで」に春の柳は萌えにけるかも」(巻十・一八四七)にしかありません。他には赤子、幼子を意味する「みどり子」の例を見るばかりです。緑はもとも色の名ではなく、新芽、若芽という語

だったという説もあります。古くから日本にあつた色の名は、光の感覚に由来する赤、黒、白、青(明、暗、顕、漠)の四つであったと指摘されています。青はまた、『万葉集』に黒と白との間を広く意味し、青柳や青山、は「冬ごもり春さり来れば」のように次の季

【訳】春は若芽が萌え出し、夏は緑となり、さて今や紅葉をまじえて美しく見える秋の山よ。

節の到来を詠む例や、春と秋を対比的に詠む例が多く、今回の歌のように季節を順に詠み込む例は珍しいといえます。

この歌は春、夏をふまえて秋の山を詠みます。それは、やがて冬の山になるのでしょうか。山々に囲まれて過ごす奈良県民は、万葉の時代から山の景色に季節の推移を感じていたのかも知れません。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

娘子らが 袖布留山の 瑞垣の

久しき時ゆ 思ひきあれば

(柿本人麻呂 卷四・五〇一)

の瑞垣が神々しく年月を経てきたように、長い間ずっとあなたを思い続けてきた、と恋情の深さ、強さを表現しています。

11月22日は、天理市布留町にある石上神宮で鎮魂祭が執り行われる日です。

鎮魂祭とは宮廷祭祀の一つであり、『先代旧事本紀』では物部氏の祖神が十種の神宝を使って神武天皇と皇后の長寿を祈ったことが起源とされます。鎮魂祭で行われる宇氣槽を撞く行為や神樂舞などは、天岩戸神話におけるアメノウズメノミコトの所作と共通するところが指摘されており、諸説ありますが、鎮魂祭は冬至の際に太陽の復活のための「たまふり」を行う祭祀であったともいわれます。『日本書紀』において伊勢神宮と石上神宮だけが「神宮」と記されていることから、両社がい

やまと
万葉がたり

かに重視されていたかがうかがえます。

この歌は二重の序詞が用いられています。まずは地名の「布留山」にかけて袖フルと表現しています。袖を振ることは神を招く所作であり、「娘子」とは巫女を想定していたとみられます。

「石上布留」(巻三・四二二)なども表現さ

れる「布留山」の「瑞垣」とは、「瑞山」(巻一・五二)や「瑞穂」(巻二・一六七)と同様に「垣」を誉めたたえた表現で、神聖な垣根のことです。以上3句が「久しき」

にかる序詞となっており、この歌が詠まれた当時、石上神宮はそのものを指します。同社の禁足地は「布留

人麻呂歌集として巻十一・二四一五にも採録されています。『古今和歌集』や『拾遺和歌集』『夫木和歌抄』など後世の歌集にも入集しました。(県立万葉文化館企画・研究係 長・井上さやか)

【訳】神おとめたちが神を迎える袖を振る、布留山の社の瑞垣が年久しいように、長い月日をずっと恋いつづけて来た。わたしは。